道徳ジャーナル

現代的な課題 SDGs特集号

121号

●21世紀　心の時代に
一方的な「支援」ではなく、共に未来をつくりたい
渡部カンコロンゴ清花……1
●道徳授業　私の実践
・生徒の発言をつないで深める道徳授業
蕗谷直子……4
・生徒が自分事として考えられるリアル感のある道徳授業～ICTを活用して～
佐瀬順一……6
●SDGs×道徳……8
●どうなるこれからの道徳授業……10

21世紀 心の時代に

一方的な「支援」ではなく、共に未来をつくりたい

NPO法人WELgee代表
渡部カンコロンゴ清花（わたなべ さやか）

就職伴走で難民を仲間に

世界が不安定化しています。紛争、迫害、差別、弾圧などから逃れざるを得ない人たちの数も増えています。私が代表を務めているＮＰＯ法人WELgee（ウェルジー）では、難民の人たちへのキャリアを通じた人生再建に伴走する活動を行っています。彼らを「安い賃金で雇える人」として企業などに紹介するのではなく、彼らの特性や経験が生かされ、受け入れ側も彼らの存在によって成長できることを目的にしています。

日本は世界的に見て、難民を受け入れる数が少ない国です。難民申請に対しての認定率は、二パーセント程度にとどまっています。国が難民を受け入れる際は、「難民条約」に基づくことになりますが、難民条約には、戦争や紛争、多様な迫害が起きている今の現実に合わない条項も少なくありません。日本は厳格に遵守しようとするため、認定が難しくなるのです。

母国を逃れて日本に来ても、難民認定されなければ彼らの居場所はありません。所属できる社会はなく、住む家もない状態が続きます。

しかし、日本社会が難民を受け入れる方法は、政府の難民認定だけではありません。企業に雇用されれば、日本で安定して暮らしていける在留資格を得られます。WELgeeは、そのサポートを行っています。

難民と企業をマッチング

私たちが難民の就職サポートを始めたのは、二〇一八年でした。WELgeeを立ち上げて二年後、都内の1Kをオフィスにしていたときです。

アフガニスタンから来た難民で、当時まだ新宿駅で野宿をしていたアハメド（仮名）という青年と知り合いました。オフィスに招き、私たちの仲間と寝袋生活を始めました。

アハメドは、母国の大掛かりな国際プロジェクトで通訳を務めていましたが、それをよく思わない過激派勢力から命を狙われ、逃れてきたのです。彼は、アフガニスタンの女子がきちんと学べる環境をつくりたい、就学率がまだ低い故郷でも、みんながオンラインなどで教育を受けられるシステムをつくりたい、という話もしてくれました。

私はシリコンバレーで創業した友人にアハメドを紹介しました。アハメドは六か月間のプログラミング研修を経て、実力が認められ就職することができました。今ではアハメドは、最先端技術のエンジニアとして活躍していて、いつも自分が作っている新しい技術が世界にどんな影響をもたらすのか語ってくれます。

アハメドは、WELgeeと出会わなければ、今の自分はないと言ってくれます。でも私にとっては「お互い様」です。アハメドと出会わなければ、今のWELgeeの活動はありませんでした。

その意味ではWELgeeの活動は、「支援」ではなく「共に未来をつくること」なのですね。アハメドも言っています。「自分が得たものを次に生かしたいね。これからだね」と。

バングラデシュで国連のインターンをしていた頃

自分の国に守ってもらえない人々

今思えば、WELgee立ち上げのきっかけは、私の七歳の頃の経験とも関係があるかもしれません。当時バングラデシュで助産師をしていた叔母を訪ねるため、母、弟、妹と一緒に行ったのです。

当時のバングラデシュは、アジア最貧国の一つに数えられていました。そこで目にした光景は衝撃的でした。私と同じくらいの背丈の女の子が、素足でぼろぼろの服を着て、バケツに入れた（おそらく）川の水を、一円程度で売っていました。きっと学校へ行っていなかったでしょう。

私が買ってあげたいと言うと、叔母は言いました。「今後もあなたが買い続けられるなら買ってもいいけれど、あの子からだけ、一回しか買わないのなら、考えたほうがいい」と。自分とは全く違う毎日を生きている同い年の子どもがいるのだと深く心に刻まれました。

再びバングラデシュを訪れたのは、大学三年生のときです。「国際協力・途上国の開発」を扱うゼミでのフィールドワークが、担当教授の専門であるバングラデシュで実施されたからです。

改めて調べると、首都から十二時間ほど離れた「チッタゴン丘陵地帯」で、先住民族が中央政府から弾圧を受けてきた歴史を知りました。当時マイノリティに関心があった私は、この地へも行ってみたいと思いました。

チッタゴン丘陵は、国連職員でも許可なしでは行けない地域でしたが、時間をかけて特別許可証を取り、ゼミの仲間の帰国後、私は一人で行きました。ここは、政府が開発のために送り込んだ入植者と、先住民族との間で、紛争の絶えない地域でした。この先住民族は、自分の国に守ってもらえない人々だったのです。

私は大学を休学して、三回バングラデシュに向かいました。私は現地のNGOでボランティアをしながら、寄宿舎学校の手伝いをしました。奨学金に応募し飛行機代や滞在費を捻出し、現地の人々と話せる語学力を身につけ、国連開発計画でインターンをする機会も得ました。

延べ二年間を現地で過ごして知ったことがあります。それは、途上国への支援は、その政府に都合のよい支援に偏ってしまうということです。政府にとって都合が悪い、または搾取の対象となっている地域や、ある特定の民族が弾圧されている場合、支援をしたいと言っても、受ける側がNOと言ったらできない構造なのです。その国のことはその国が決める原則がありますが、よい結果をもたらす時と、そうではない時があります。

マイノリティが迫害を受け続ける、世界から見えない紛争地域は、チッタゴン丘陵だけではなく、たくさんあります。私はこれまでずいぶん遠くから国際協力を学んでいたものだと思いました。もっとしっかり学びたいと考え、大学院へ進学しました。

難民と共に未来をつくる

そんな中で、私は日本に難民として逃れてきた若者たちと出会ったのです。彼らにはそれぞれ、自分の将来や母国の未来に対する、夢や目標がありました。自国で守ってもらえない人たちを、国外から手助けしようとするだけでは難しい。でも日本へ来た難民の人たちと一緒に、未来をつくることならできる。彼らと話をしながら、私はそう考えました。こうして、難民の人たちと私たちとが力を合わせられる方法を考え、WELgeeは立ち上がったのです。

56名のビジネスリーダーと、難民人材20名のキャリア交流会を開催

私は子どもの頃、「将来の夢」や「なりたい職業」を書くとき、しっくりこない中で、適当に欄を埋めていました。しかし、WELgeeを立ち上げ、今仕事として仲間と社会課題に向き合うことで、したい仕事は自分でつくれることを知りました。

以前は、日本で外国のニュースを聞いて、自分事と思える子どもたちは少なかったかもしれません。でもこの数年で、公立校にも外国にルーツを持つ児童生徒が増えました。日本と世界も近くなっています。国際理解についても、児童生徒たちの意識はどんどん変化していることでしょう。

さまざまなことを学ぶ中で「あれ、何でだろう」と思ったら、その小さなハテナを深掘りする。先生方もその疑問を大切にしてあげてください。それが、国際理解の始まりといえると思います。

未来をつくる子どもたちと先生へ

勇気を持って国から逃れ、奮闘しながら人生を再建しようとしている若者たちと関わって思うことがあります。今いる場所がしんどかったら逃げてもいい。今いる家庭、学校、地域を出たっていい。もっとあなたらしく生きられる場所があるはず。日本は広いし、世界はもっと広いです。あなたを応援してくれる人に必ず出会えるから。皆さんが今日も「自分」を生きられますように。

もうひとつ、私が難民の人たちと関わって思うことは、彼らの中にはチャレンジャーが多いということです。いろんなチャンスを自分でつくり、考えて行動する力があったからこそ、避難してこられたのだと思います。ビジネスパートナーになれば、これまでの固定観念を超えて、斬新なアイデアを出せるのでは、と思うのです。企業が積極的に難民受け入れに関われる社会になり、難民の人たちの選択肢が広がるとよいと思っています。

（取材・文　入澤宣幸）

写真提供／NPO法人WeLgee

道徳授業 私の実践

生徒の発言をつないで深める道徳授業

福岡県古賀市立
古賀北中学校教諭
蕗谷 直子

はじめに

中学三年生は、進学や就職を具体的に意識し始める、また意識せざるを得ない学年です。学級活動で行う生活や学習目標の記述や、進路説明会、高等学校等の出張授業などを通して、生徒は「こういう生活が望ましい」「目標を達成するためにはこのような生活を送らなければならない」という知識を自ずと身につけています。

しかし、教師である私自身がそうであるように、「望ましい生活のあり方を知っている」イコール「望ましい生活を送っている」ではありません。生徒の会話では「こんな生活じゃダメって分かっているけど」という言葉を耳にします。こうありたい自分や、そのための生活を思い描いているのに、行動が伴わないという現実、そこに葛藤が生まれていることに着目し、自分自身の生活から「自制」について考えさせたいと思いました。

教材について

○主題名　望ましい生活習慣

○内容項目　節度、節制

○教材名　「独りを慎む」（『新・中学生の道徳　明日への扉3』学研）

○ねらい　「人が見ていないと、してはいけないことをしようとしてしまう癖」について自身の生活を振り返り、豊かな生活のために、「自制」を心がけようとする心情を育む。

授業の実際

【導入】

自身の生活について共有することで、自分だけが葛藤を感じているわけではないことを認知させたいと考えました。

①学習支援ソフトの中の、意見を交流できるシステムを活用し、「人が見ていないとしてしまうことはありますか？」という質問を、匿名で自身の生活について回答させました。

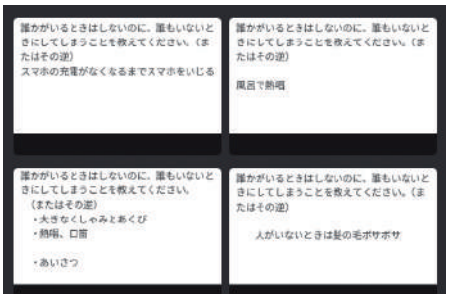
・親がいないときは、スマホをそばに置いて動画を流しながら勉強している。

・帰ってきたら、靴下を脱いでそのままにしている。

・ゴミ箱にゴミを投げ入れる。

・人がいないと「なんで！」「むかつく」と愚痴を言う。

・誰もいなかったら、隠さないであくびをする。



②①の回答を大型モニターで共有し、それを見ながら班で話し合いました。

【展開】

教材を読んで「人が見ていないと、してはいけないことをしようとしてしまう癖」について問いました。

T：教材の中にある、「ソーセージをいためて、フライパンの中から食べていました」という部分についてはどう思いますか？

S：今の自分はごはんを作らないからしないけれど、一人暮らしをしたらするかも。

S：別に人に迷惑をかけてないからよくない？

T：人に迷惑をかけなければ、「してはいけない」と感じていることをしてもよいということでしょうか？

S：人の前でしなければよいと思う。

S：でも癖になって、誰かがいるときにしてしまうかも。

S：そうしたら不快に思われるから、結局迷惑をかけてしまう。

S：周りから「そういう人なんだ」と思われてしまうよね。

生徒の中で、「堕落した生活をしていると、いつかそれが習慣になり、人に迷惑をかける上に人前で恥をかく」という考えがまとまりつつありました。

次に「独りでいても、慎むべきものは慎まなくてはいけない」と筆者が考える理由について問いました。

T：「独りを慎む」とタイトルにもあるけれど、これについてはどう思いますか？

S：良くないことを続けていたら習慣になって戻れなくなるから、気をつけようと思う。

S：人の目がないときこそ本当の自分が見えてくるから、誰もいなくても、誰かが見ていると思って行動することが必要だということ。

S：「独りを慎む」というのは、自分自身をコントロールするということだと思う。

生徒は、「いつでも誰かがいるように生活できること（自身のコントロール）が理想」ということを話し合いの中で見つけたようでした。授業のテーマである「自制」を表す「自身をコントロールする」という言葉が出てきました。

そこで、切り返しとして次のように問いました。

T：なるほど。いつでも変わりなく「自身をコントロールする」生活ができたらいいけれど、みんなはそのようにできていますか？

S：できていません。そんなの無理。

S：たまには自分を甘やかすことも必要。

ここに理想と現実の乖離があることに改めて気付いたようでした。

【終末】

導入で、自身の行動を確認したように、理想の生活を頭では理解していてもなかなか実践できないのが人であることを話し、その上で「自身をコントロールする」というのはどういうことかを問いかけました。

T：誰かがいても、いなくても、変わらない生活を送ることが理想だけれど、現実的に難しいときもありますね。どうしたらよいでしょう。

S：間違えるたびに反省して、次はコントロールできるように心がける。

S：教材にも、「闇の中で（略）人間としては失格でしょう」とある。自分で行いを振り返り続けることが、自分をコントロールすることだと思う。

授業後に提出させた振り返りシートには、「我慢は大切だという話かと思っていたけれど、みんなの発言を聞く中で、自分をコントロールするというのは、なりたい自分に近づくために行動を考えることだと思うようになった」という記述が見られました。

おわりに

生徒は、匿名で寄せられたエピソードに笑ったり共感したりすることで、「自分をコントロールする」ことの難しさを知り、「人に迷惑をかけなければよいのか」という問いによって、他者のためだけでなく、自身の豊かな生活のために「自制」に向かおうとする心がけの大切さに気付いていました。

生徒の発言から授業を展開しようとすると、気付かせたい価値から離れてしまうこともあります。しかし、自分たちの言葉で表し、見つけた「価値」は心に根づくものだと思います。これからも試行錯誤しながら、生徒が「自分事」として考えられる道徳の授業を実践したいと思います。

（ふきや　なおこ）

道徳授業 私の実践

生徒が自分事として考えられるリアル感のある道徳授業
～ICTを活用して～

東京都町田市立
薬師中学校主幹教諭
佐瀬順一

はじめに

中学校の道徳の授業で大切なのは、生徒たちが「自分事」として捉えられるようにすることであると私は考えている。

私の専科は国語なので、物語文の読解を教えることがある。国語の物語文では、自分をストーリーの外側に置いて客観視することが求められる。しかし、読み物教材を用いた道徳の授業では、自分は登場人物、多くは主人公の視点で、主人公に共感しながら、自分事として感じることが求められる。

そこで、今回は、生徒が自分事として参加するICTを活用する道徳授業を考えて実践した。

教材について

○**教材名**　「裏庭での出来事」（『新・中学生の道徳　明日への扉　1』学研）

○**主題名**　誠実な生き方

○**内容項目**　自主、自律、自由と責任

○**ねらい**　責任ある行動とは自ら考え、判断し、誠実に実行することであることに気付き、自ら判断できる態度を育てる。

授業の実際

リアル感のある授業にする一つの工夫として、導入で本物のサッカーボールを生徒に提示した。

T「今日は、このサッカーボールを巡る事件について考える授業です。さて、どんな内容だと思いますか？」

S「サッカー部の試合」

S「サッカー選手を目指す中学生が出てくる話」

S「サッカーボールを作る職人の話」

生徒からはさまざまなアイデアが出てきた。実物を示すことにより、リアル感を高め、生徒が物語の中へ入りやすくなる。

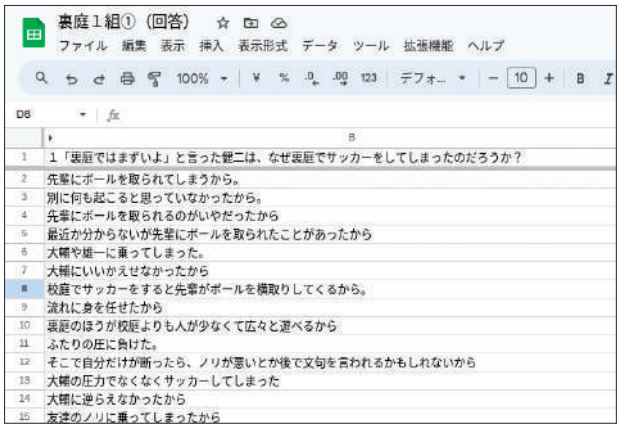
範読の後、Googleフォームを用いて生徒に発問を示した。

発問①：「裏庭はまずいよ。」と言った健二は、なぜ裏庭でサッカーをしてしまったのだろうか？

発問は一問ずつ個別のフォームで提示し、回答を入力させた。フォームを個別化することで、生徒に先読みさせずに、一つの発問に集中して回答させ

ることを意図した。

そして、フォームに入力、送信すると即座に作成されるスプレッドシートをプロジェクターで拡大表示し、生徒の意見をシェアした。



従来の挙手による指名発言の展開では、発問一つ当たり、五、六名の意見しか聞くことができない。しかし、フォームとスプレッドシートを用いると、即座に、クラス全員の意見を表示することができる。主だった意見を教師が拾い読みすることで、十五名以上の意見を紹介することができる。

また、フォーム入力の際、生徒の氏名の入力は意図的に省いた。したがって、スクリーンには意見のみが表示されることになる。生徒は匿名性が担保されることで、安心して本音に近い意見を表明することができる。これもまた、リアル感を高めることにつながると考える。

発問②：ガラスを割ってしまった雄一が先生に報告に行こうとしたとき「そんなのあとでいいよ。」と言った大輔の言葉をどう思うか？

【生徒の回答】

・自分の気持ちを優先しているから自分勝手だなと思う。二人の意見も聞いたほうがいい。

・自分勝手だと思いました。友達の気持ちを考えていない。

・あとで言いに行ったら罪が重くなるし、言わなかったらずっと心が落ち着かない。

発問③：雄一に「なんだよ、汚ねえなぁ。」と言われたときの健二の気持ちはどうだったろうか？

【生徒の回答】

・大輔が勝手に始めたんだろ。僕は別に隠すつもりなかったのに。大輔がそう言ったせいで、僕が悪いやつみたいじゃないか。

・健二はすごく焦ってしまっている気がする。本当は謝りたいんじゃないかと思った。

発問④：翌日、健二はどんな気持ちで職員室に向かったのだろうか？

【生徒の回答】

・ずっと罪悪感や悪いことをしたという気持ちを背負うのは嫌だから、すっきりさせたい。大輔や雄一に振り回されず言いに行こう。

・面倒くさい。

・自分のやってしまったことはしっかり勇気を出して謝れば大丈夫という前向きで素直な気持ち。

中心発問となる「発問⑤：自分の気持ちに正直に行動するために必要なことは何だろうか？」では、Ｇｏｏｇｌｅジャムボードというアプリケーションを用いて、小グループの話し合いを行った。ジャムボードは付箋に自分の意見を書いて張り付けていくことができる。まずは、ブレインストーミング的にグループで意見を出し合い、その後話し合って、重要だと思われる順に一位から五位まで順位付けを行うように指示をした。

終末として、健二、雄一、大輔の一人を選んで、自分がクラスメートになった設定で手紙を書くという課題をフォームで行った。

「健二君へ、今回の事件での君の行動はとてもよいと思いました。悪いことをしてしまったら自分で先生に報告して謝ることができるのは、本当にすごいと思いました。僕もそういう人になりたいです。」

生徒の本音に近いなと感じられる手紙が多く見られ、リアル感のある授業となった。

（させ　じゅんいち）

SDGs×道徳

連載 第17回

SDGsのこれまでとこれから（前編）

一般社団法人
グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）理事
木村（きむら）　大輔（だいすけ）

本連載ではSDGsと教育について、特に道徳とSDGsの親和性や学習の組み立て方、変容をもたらすために必要な意識すべき領域（知識・思考力、社会・感情、行動・行為）などについて紹介してきました。これまでの内容が、道徳だけではなく教科横断的な学びや、総合的な学習の時間との連携などの一助になっていたら幸いです。

連載をまとめるにあたって、前編では、SDGsが私たちの生活や学校教育にどのくらい浸透してきたのかを振り返ります。

MDGsからSDGsへ

SDGsが国連で採択される前には、二〇一五年までに達成すべきゴールとしてミレニアム開発目標（MDGs）がありました。貧困削減や公衆衛生、教育やジェンダー平等などの七つのWhat（こと）と、パートナーシップという一つのHow（方法、手段）で構成された世界の目標です。MDGsにより世界の貧困や格差は少しずつ改善が見られましたが、十分とは言えない状況でした。それに加え、以前から警鐘を鳴らしていた気候変動や紛争などの地球規模の課題が悪化し、地球が『持続不可能』な状態になる未来がすぐそこまで迫ってきました。

そこで、世界のライフスタイルを変革するため、二〇一五年に国連加盟国の全会一致でSDGsが採択されました。SDGsのゴールの一列目に当たるゴール1～6は、MDGsから続くゴールばかりです。

このSDGs、二〇一六年あたりまでは認知度が非常に低く、私たちもSDGsの価値を説明するのに非常に苦労したことを覚えています。

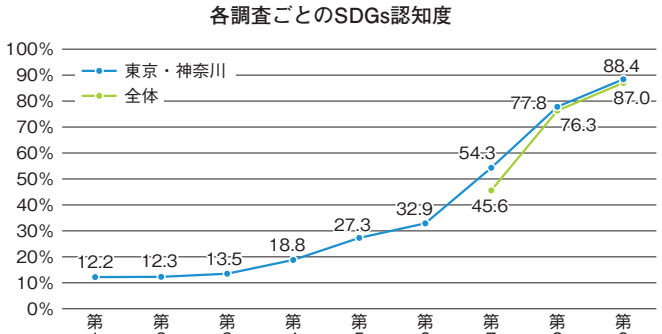
認知度の上昇と社会の変化

二〇一七年七月に朝日新聞社が開始したSDGs認知度調査[*1]では、東京・神奈川を対象とした調査で認知度は十二・二パーセント、十代から五十代の現役世代の男性のスコアが高いという結果でした。関心度は男性より女性のほうが高く、また学生や六十代以上の人の関心が比較的高かったことが示されています。認知度が大きく上がり始めたのは二〇一九年。二十七パーセント程度になり、二〇二三年二月の直近の認知度調査では全国で八十七パーセントと、かなり高まりました。

では、内容についての理解はどうでしょうか。国連の設定した目標であること、十七のゴールがあることは過半数に認知されていますが、ターゲットが一六九あること、達成期限が二〇三〇年までであることなどは四割弱、各国の達成状況が毎年モニタリングされていることや、MDGsを含む背景について知っている、聞いたことがある人は三割前後に留まっています。十代は内容についての知識が全年代で最も高くなっています。この影響は学校教育の賜

物であると言ってもよいでしょう。

＊1　出典：2018年4月25日　朝日新聞デジタル【SDGsの認知度調査報告】https://miraimedia.asahi.com/awareness_survey/
＊2　出典：2023年4月27日　朝日新聞デジタル【第9回SDGs認知度調査】https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey09/



出典：2023年４月27日　朝日新聞デジタル【第９回SDGs認知度調査】
https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey09/

SDGsが採択されてから、社会ではどのような変化が起きたでしょうか。二〇一〇年代当初「グローバル」と言うと「グローバル人材」、ダイバーシティと言うと「女性の社会参画」、気候変動についての議論では「3R」などがキーワードとして挙げられていました。

SDGs採択後、グローバル人材の目的は「日本のため」に世界で活躍できる人材を育てることだけでなく、グローバル社会の発展に貢献できるグローバル・シチズン（地球市民）を育てることに広がっています。ダイバーシティは、今では宗教、人種、文化、国籍、ジェンダー平等という視点が日常的になりつつあり、ルールが整備されてきています。気候変動については、3Rに加え、プラスチック袋の有料化、紙など代替の包装に変わるという、制度的・構造的な変化が起きました。それに加え、SNSなどのメディアの影響で、マイクロプラスチックや生物多様性についての認知や理解が高まっています。

SDGsと学校教育

では、学校教育の変化を見てみましょう。まずは、学び方が変わってきたと言えます。SDGsが採択されたころは、「アクティブラーニング」が学校教育における一つのキーワードでした。各教科や総合的な学習の時間、特別活動など全ての学習を通じて資質・能力を育成するという学びの方向性が議論されました。この議論と共に、育成すべき資質・能力の先に何があるのか、教育は何のためにあるのかという原点に立ち返った議論もなされました。

そして、二〇二〇年度から随時適用された新学習指導要領には、初めて前文が加わりました。前文では、ESDの視点が盛り込まれた「持続可能な社会の創り手」の育成が示されています。

この背景にSDGsがあります。SDGsが目指す「誰一人取り残さない社会」の実現には、教育を通じた意識や行動の変容が重要であることが世界的に認識されました。世界で教育政策の足並みをそろえようと、ESDやグローバル・シチズンシップ教育、環境教育や人権教育という、「学習者の変容をもたらす教育＝SDG4．7」の推進が加速しました。こうして、国内の発展を主としてきた教育が、地球規模の課題解決に向けた大切な手段として変容してきました。

「持続可能な社会の創り手」の育成には、学習者の意識と行動の変容をもたらすことが求められます。これまで教育現場で重視されてきた「知識」「思考力」という認知領域に加え、他者や自然との関わりから学ぶ「社会・情動」領域、そして、持続可能な社会に向けたアクションを導く「行動・行為」に係る領域をどのように扱い、変容を促していくか。そのための学習デザインを考えて、試行錯誤しながら実践を重ねていくことが必要です。

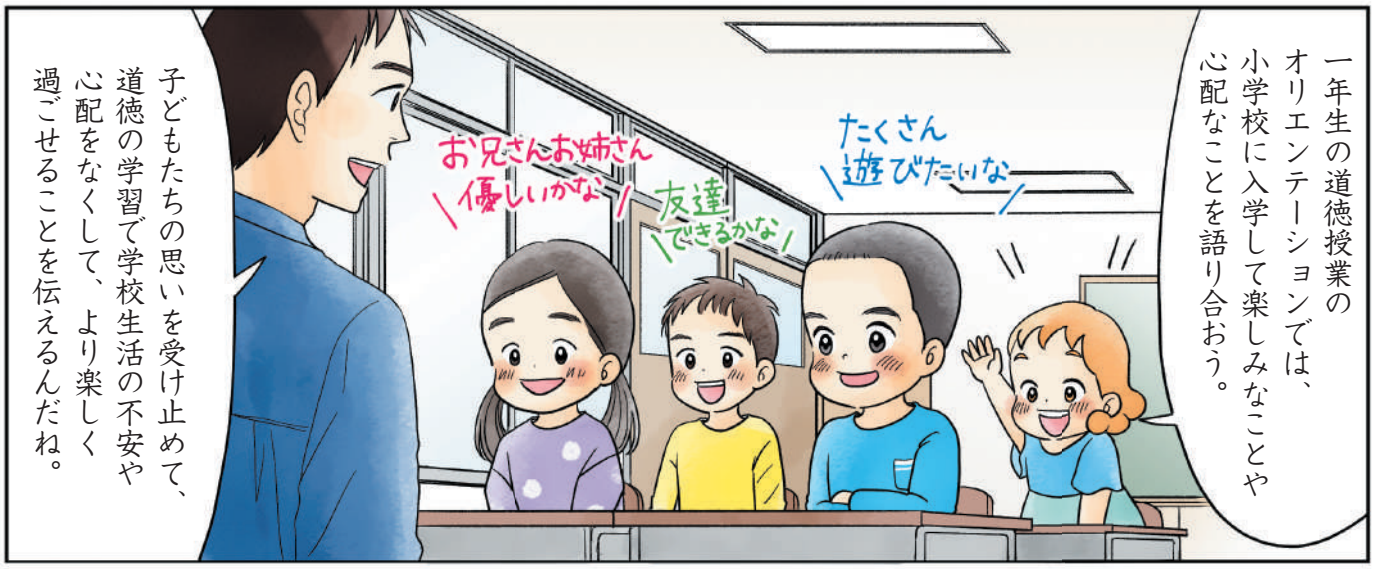
また、教科書の内容も刷新されています。SDGsが大切にしている、五つのP（人間、繁栄、地球、平和、パートナーシップ）に関する内容が盛り込まれています。これらの内容をどのように扱い、単元やテーマをつなげていくか考えると、さまざまな可能性が広がるのではないでしょうか。特に、道徳は他教科で問いにくい「価値観」や「社会・情動」領域を扱う上で中核的な役割を果たすことができるため、ぜひ活用していただきたいと思います。

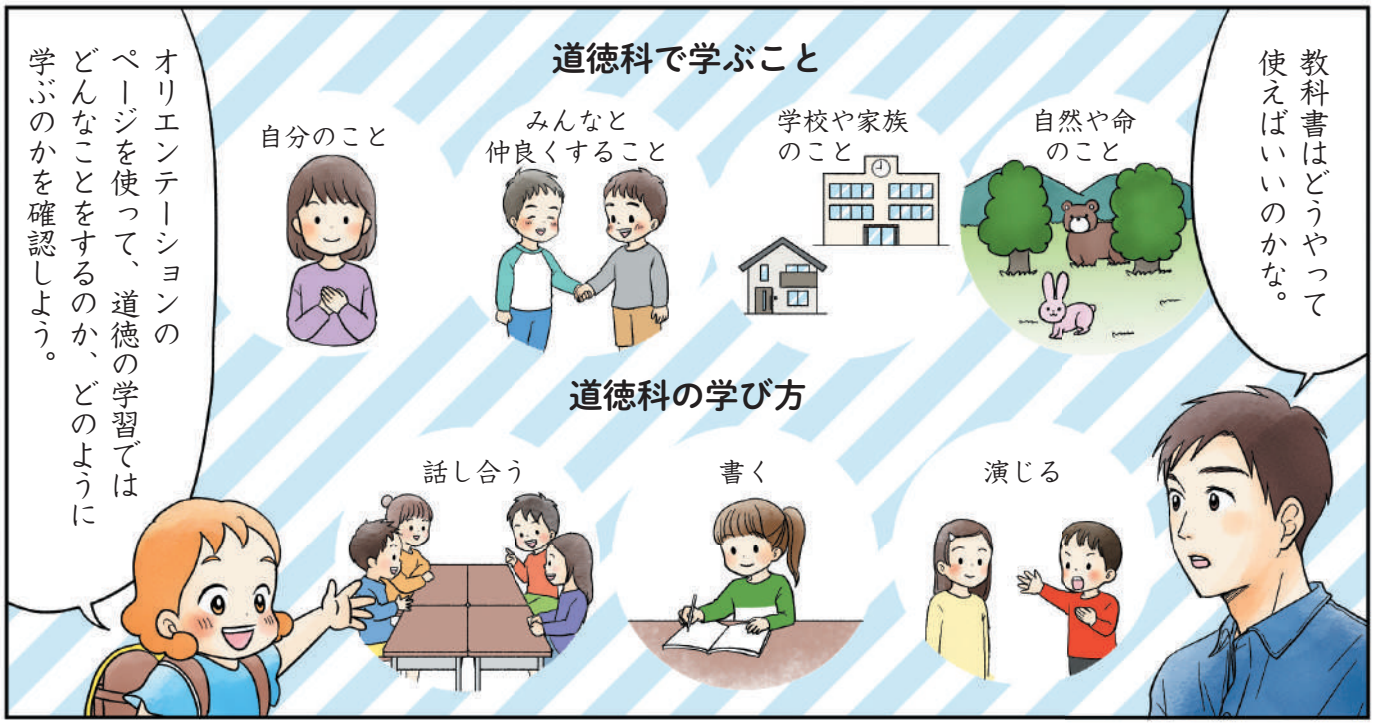
どうなるこれからの道徳授業

連載23回　幼保小中連携編

監修・廣瀬仁郎　法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

とくちゃん　学先生


一年生の道徳授業のオリエンテーションでは、小学校に入学して楽しみなことや心配なことを語り合おう。
お兄さんお姉さん優しいかな
友達できるかな
たくさん遊びたいな
子どもたちの思いを受け止めて、道徳の学習で学校生活の不安や心配をなくして、より楽しく過ごせることを伝えるんだね。


教科書はどうやって使えばいいのかな。
道徳科で学ぶこと
自分のこと
みんなと仲良くすること
学校や家族のこと
自然や命のこと
道徳科の学び方
話し合う
書く
演じる
オリエンテーションのページを使って、道徳の学習ではどんなことをするのか、どのように学ぶのかを確認しよう。

小学校と中学校をつなぐには、六年生の最後のページを使って、中学生になる自分へのメッセージを書く活動がおすすめだよ。
一年間の道徳の振り返りをして、中学校生活に目を向けられるようになっているんだね。

いざ中学校へ！
特別活動などでも、中学校生活について調べる活動をして、進学への期待を膨らませよう。

道徳ジャーナル121号 令和6年5月発行

発行所 株式会社Gakken **発行人** 甲原 洋／**編集人** 麻生征宏

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL（03）6431-1565（編集） **それ以外のことは**…TEL（03）6431-1151（販売）

「学研 学校教育ネット」 https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/ ●『道徳ジャーナル』のPDF版はWEBページから。

9300009233

＊LINE 公式アカウントのお知らせ＊

（株）Gakken おんたま先生

体育・保健体育や道徳、特別支援教育、ICT 教育などの最新情報や、オンラインセミナーの開催情報を配信しています。

友達募集中！

◀QR コードをスキャンすると LINE の友達に追加されます。